

わが為すこと、 我、知る

志信会ができてからのコ
ト。

著：大芝太郎
電書：あるほっぷ俱樂部

志信会創設

志信会の（裏の？）正式名称は、

「百志塾改め、大西 信弥とその被害者の会」です。

「裏の」というのは、志信会を政治団体登録する時に

「百志塾改め、大西信弥とその被害者の会」では長いのと、
いくら関西とはいえ、お役所に登録するのは・・・ということで
会を「志信会」として正式に登録したためです。

いずれにせよ、2003年1月31日、名称を百志塾から志信会に変更し
正式に政治団体登録を済ませ、会は新たな活動を開始しました。

3月27日の設立総会で公開された志信会の
行動規範は以下の通りです。

1. 己を信じ、（自らの意志を信じる。意思と力で社会を変えることができる
と信じる。現状を嘆くだけで、他者へ責任転嫁してはならない。）
2. 夢を信じ、（自らの大志を信じる。大志はゆるがぬ意志をもって世に
明言する。理念を提言することを怖れてはならない。）
3. 人を信じ、（自らの仲間を信じる。彼らこそが社会を変える原動力とな
ることを信じる。少数であることを恥じてはならない。）
4. 実践する。（大志に恥じない生き方をする。たとえ一人になろうとも、「わが
為すこと」をあきらめてはならない。）

この行動規範は、大西会長の人生そのものです。

そしてこの理念は人からどんなに誤解されても、

これからも変わることはないと思います。

大西会長が政治に関して体験したことは、ぼくたちの常識では

理解することが出来ないことばかりでした。

大西会長は政治活動の中で党や政治家の先生の“朝令暮改”の連続に振り回され、

“恥も外聞も”恐れない多くの政治家の先生が

正義や信念を熱く語る姿に驚愕していました。

現状の政治に絶望する一方で、本当の政治の姿や

それを実践する政治家の出現を信じて、



大西会長は「志信会」を設立しました。

しかし、大西会長が本当にやりたいことは、辛くても歯を食いしばって、自分の「志」を信じて戦っている人たちを全力で応援したい！
ということです。

だから政治だとか経済だとかの枠組みはあまり意味がないのです。

政治、経済、文化、教育だけでなく、スポーツや思想、哲学、宗教というフィールドも志信会が活動するテーマです。



佐久間敏雅氏は、現在、志信会執行本部のCOOです。ちょっと時を遡ります。ぼくが佐久間さんと初めてあったのは2001年で、当時ぼくが働いていた会社のオフィスでした。佐久間さんの経歴を簡単に紹介すると、兵庫県神戸市出身、鹿児島ラサール中・高校から東京大学法学部を経てP&Gに入社。

その後P&Gでも最速で出世していきました。

20歳後半時には年収が1000万円をはるかに超えていた彼が、愛犬を家族に迎え入れたことで、その後の人生は一変します。現状の日本人とペットの関係やペット業界が抱える問題に、敢然と挑戦を開始します。その当時、佐久間さんは、人がうらやましいと思うような全てのを捨てて、たった一人で無謀とも思える戦いに挑んでいたのです。彼は、会社をやめて起業し、家庭も失い、月々の生活に必要な5万円を役員報酬としてもらいながら、日々黙々と真摯に生きていました。

その後ぼくは、佐久間さんを大西会長に紹介し、大西会長も佐久間さんの姿にすっかり魅せられていました。佐久間さんは寡黙で自らを誇示するようなこともありません。ぼくの口から伝えるまで、大西会長はこのことを知りませんでした。

佐久間さん自身は意識をしていませんでしたが、彼が大西会長に投げかけた課題は、百志塾の立ち上げやその後の志信会の創設に大きく影響していきます。大西会長は語っています。

『「政治を変える、日本を変える」という標語はまさに、彼のような真に勇気ある若者一人ひとりの挑戦の延長にしか有り得ない。狭義的に政治家志望者を募るだけでなく、そういった志ある若者達が切磋琢磨しながら、それぞれのフィールドでこの世の有様を正していく。そして、そのような若者を支援する会の創設こそ、私が求める会の精神に合致する』



佐久間さんの生き様は、大西会長が志信会を設立する決定的な要因となりました。

大西会長が信じるもの

志信会の基本理念に大きな影響を与えた映画があります。

「ペイ・フォワード」。

11歳のトレバーは、担任のシモネット先生から

「もし君たちが世界を変えたいと思ったら、何をする？」と問い掛けられ、
悩んだ末にあるアイデアを思いつきます。



「受けた親切をその相手に返すのではなく、
身の回りにいる別の人へと贈り、
その彼らがさらに別の人へと贈り...」
という奇想天外なアイデアです。
やがて、このアイデアが彼の知らないところで
確実に広がり奇跡を起こしていきます。

『受けた厚意はどんなことをしてでもお返ししなければ』と強く信じていた大西会長は、
この映画を見て天地がひっくり返るほどびっくりしました。

これまでに様々な方々から受けた厚情を、

次世代に繋げていく「ペイ・フォワード」の概念は世界を変えることができます。

そして同時に、ぼくたち一人一人が、誰かのために何が「できるか」を
問う発想の転換を広げることができれば

「ペイ・フォワード」の理念が絶えることはありません。

国民一人一人を変えていくこと、それは“夢物語”に聞こえるかもしれません。

でも、素直に“夢”を語ることが難しい現代だからこそ、
大西会長は“己が夢を信じて”日々奮闘している人々を支援し
共に行動するための組織として志信会を設立しました。

「夢は限りなく」...

大西会長は現代の日本で、
“世界を変える夢”を語れる大人が
少ないことに寂しさを感じています。
それを語ることは「大人気ない」「恥ずかしい」
ことなのかも知れません。

でも、もし、ほんの少しでも、本気で自分が
世界を変えられると思えたら...。
世界は、夢や可能性を信じた人のものです。



大西会長は自分を変える勇気を持つ人、「己」や「夢」、そして「人」を信じる勇気を持つ人が

「世界を変える」可能性を信じています。
会の設立過程で、志を共有できるメンバーに巡り会い、
出来た仲間と共に、世界を変えることができると信じています。

出発

このようにして使命感に突き動かされて、
理念に忠実に従い設立した志信会でしたが、
当時は何の勝算もなく
そもそも何と戦っているのかさえ
理解してもらうことはできませんでした。
結局実行部隊と呼べる人員は4名、
志信会の理念を理解していただいた
ボードメンバーの皆様は10名足らずで、
それまで大西会長と共に活動を進めてきた
メンバーの多くは志信会への入会には足踏みしてしまいました。



「結局大西さんは何をしたいの？」
「いつ選挙に出るのですか？」

志信会を始めた当初、会の理念を紹介させていただく機会に恵まれても、
結局そんな反応が返ってくるだけで、
なかなか志信会が何をしたいのか？を
理解してもらうことはできませんでした。

“全ての人が生き生きと暮らし、
夢に向かって挑戦することを歓迎するような社会にしたい”

という単純過ぎる理念は、多くの人々が持っている政治の概念とはあまりにも違いすぎて、
それを理解し協力してもらうことは当然困難でした。



そんな中でも、2003年の統一地方選挙で、
支援した候補6名のうち5名が当選するなど
それなりの成果は出してきましたが、
同年に行われた国政選挙での選挙応援には、
志信会として駆けつけても、
這々の体であしらわれることが続くなど、
選挙応援をすることですら難しい状況にありました。

一方で志信会政治塾としてのスタンス及び総選挙に当たる基本方針が固まったのもこの時期で、
その後政治というフィールドで志信会の目指すものがより具体的になっていきました。
以下に 2003 年に公表された志信会政治塾が目指すべき政治の方向性スタンスを記します。

志信会は、これからの政治が歩むべきステップを、

1. 政官業利権構造を根本的に解消した公正で透明な社会、機会平等の社会の実現があり（第一ステップ）
 2. その上で、セーフティネットを整えた社会のあり方、すなわちリスクの個人化と社会化のバランスをどう考えるかの、新保守勢力と欧州型リベラル勢力が拮抗していく真の二大政党政治の確立にあると考える（第二ステップ）
- 。

現状の政治情勢を鑑みると、長年に渡る自民党一党支配は、その弊害が著しく、

これを否定せざるを得ない。したがって当会は国政選挙に当たり、
現有勢力温存を求める候補者は応援しないこととする。

また、当会が公認または推薦をする候補者は、当会の行動指針
-" たった一人でも、己を信じ、夢を信じ、人を信じ、実践する "-
を体現する逸材であることを要する。

すなわち政策や夢を実現するための「精神の強固さ」を持ち、

「日本を自立した社会へと変革するための一事業」を
成し遂げる能力を有した候補者を応援することとする。」

会長、走る

「佐久間さんからのメール確認したか？
今な、佐久間さんから紹介された鬼木候補のところに
向かっている最中や。」

「えっ？この時間にですか？」

「車でな。夜通し走って福岡に朝到着して、
そのまま朝立ちに合流や。」

鬼木さんは志信会執行部のトップ、
佐久間氏のラグビー部（高校）の後輩です。
鬼木さんのホームページのトップページには当時
「信じる力」と言う言葉が大きく掲げられ、なんの後ろ盾もない中
「福岡から日本を、そして世界を変えよう」
と活動している様子が映し出されていました。
大西会長は、その圧倒的な発信力に魅せられ、HPを見たその夜のうちに車に乗り込み、
福岡に向かっていました。



自らの信念と行動力だけで、
小さな体で朝立ちを続けて来た鬼木夫妻は、
会長にとって、初めて出会った志信会の「申し子」
のように写っていました。
鬼木夫妻と言葉を交わすほど大西会長は、
突然現れた自分の言葉を無防備なまでに

素直に聞き入れる姿に、「信じる力」を徹底して行動で示している鬼木さんの
底知れない可能性をみていました。

そして、鬼木さんを応援するボランティア「子鬼隊」と合流します。
彼らもまた会長のつむぐ言葉を、息を殺して聞いていました。
その姿に大西会長は彼らを全力でバックアップすることを決意します。

佐久間さんとぼくも大西会長の一声で福岡入りします。
そして鬼木誠福岡県議候補を正式に推薦することを会として満場一致で決定します。

大西会長は選挙戦の最終日（4月13日（土））にグランドフィナーレに立ち会うため
福岡に入りました。グランドフィナーレの場の片隅にたった会長は、
目の前で起こったことが信じられませんでした。
ロッキーのテーマに乗って鬼木候補が登場すると同時に、
歓声と百本以上のペンライトが一斉に天に向かって上がったのです。



鬼木候補を応援するため、百人近いのボランティアがペンライトを持って
鬼木候補を待っていたのです。鬼木候補とたった数人の子鬼隊が、
この数週間の間で驚くほど光輝き、これだけ多くのボランティアを一つにまとめあげていました。
涙が潤んだ会長の目には、ペンライトの光が、幻想的な光の輪を描き続けていました。

One for All.All for One

「ズウウ、ズウウ、ズウウ」
携帯電話のバイブに反応します。

「はい。タロウです。」
「夜遅くごめんな。」
「いえ。」
「あのな、奥さんて、イラクで
亡くなった方おられるやろ。高校の頃の
ラグビー部時代の先輩でなあ。」
「えっ、そうなんですか……」



事件の一報が流れた時、正直、ぼくは「とうとう日本人が巻き込まれてしまった」
という印象しか持っていませんでした。特別な情報も持っていなければ、
国際情勢に詳しい訳でもないぼくは、どうしてあの戦争が起こったのかも分からず、
日本がドンドンまきこまれていく理由も分からず、戦争をしているという意識すら
持っていませんでした。しかし、大西会長の電話は、ぼくの感覚をひっくり返してしまいました。
その時、ぼくたちは“戦争”をしていたんです。



志信会が発足した年の11月、この悲しい事件が起こりました。

「奥君が輝きを失わず、日本の代表として仕事に
邁進していたことに心が熱くなります。
あまりに早すぎる別れですが、ご冥福をお祈りいたします。」

母校での追悼集会の際、奥先輩の同級生の女性から
同校に送られた文章を目にした時、大西会長は不意に涙が止め処なく溢れだしました。
大西会長は、涙を止めようと自分の決意を心の中で叫んでいました。
「今度こそ、奥先輩の意志を継いでいく」
この決意をしてから、すでに3年という月日が過ぎていきます。

志信会を
「そのフィールドに関わらず、
現状を打破し
よりよい社会を創るために
自ら行動し、
日々奮闘している人々を支援し、
共に行動する組織」にする。



それは、奥大使が大西会長の

自宅で

必死に語っていた、

One for All, All for One

（一人がみんなのために、

みんなが一人のために）

と全く同じ理念です。

そして、この思いは、大西会長の中でますます大きくなっています。

DNA を伝える子供を終生持てないと宣言された日から、

大西会長はその思いや精神を引き継いでくれる「我が子」のような人たちを、

今も欲しているのかも知れません。4



天上大風

2004年、会の政治塾基本方針に従って参議院議員選挙の応援を

させていただく過程でぼくたちは、

半田善三氏と出会うことができました。

半田氏は細川護熙元首相が参議院議員時代から長年にわたり政治行動を共にし、

日本の改革に尽力をつくしてこられた方です。

細川内閣発足時には日本新党事務局次長という立場におられました。

そして当時、当会顧問をしていただいた陳氏のご紹介で、参院選で民主党比例区より

出馬した半田氏とお会いさせていただいたことが初めての出会いになります。

「天上大風」、半田氏が2004年参院選で

御旗に掲げた政治思想です。

「天上大風」は良寛和尚が童にせがまれて、

屏風に描いた言葉です。

半田氏は「天上大風」にかけた想いを

「未来には希望や恐れ、崇高さがある。

そこに向かって飛び立つ勇気を我々は持たねばならない。」



と天を仰ぎながら語ってくれました。分かりやすさを追求する今の時代に

この“のぼり旗”はあまりに壮大で、半田氏の思いを理解する人々は少ないかもしれません。

しかし、「天上大風」はまさにぼくたち一人一人がそうありたいと求める姿です。

「天上大風」を体現する半田氏の人柄を知れば知るほど、

ぼくたちは半田善三という人を応援できることの喜びを実感していきます。



志信会政治塾として正式に推薦するため、

大西会長は、佐久間さんを伴って、津山で行われた

半田氏の出陣式に出席しました。

その席上、半田後援会諸氏の眼前で

志信会推薦状授与式が用意されていました。

推薦状授与式直後、大西は後援会諸氏に向け

3分程度の挨拶をさせて頂きましたが、半田氏は3分間の挨拶の間

推薦状を授与した時の姿勢のまま、深々と頭を垂れ、

推薦状を両手で精一杯高く掲げて、話を聞いていたのです。

この事実は後に撮られていた一葉の写真によって明らかになるのですが、

それを発見したとき、ぼくたちは感動と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

出陣後の最初の選挙運動は、出雲大社分院での

「選挙期間中のスタッフ、ボランティアの皆さんの安全祈願」をされていました。

これまで政治塾として幾度か選挙を戦ってきた私たちにとって、改めて大切なものを思い出させていただいたように思います。

2004年の選挙では絶対不利の中、半田善三氏は

「自らが立つことで伝えられることがある」と信じ選挙戦に立ちました。
それでも選挙の結果が明らかになる最後の最後まで
半田氏は自分を応援してくれている人々を信じ、全力で戦っていました。
敗戦が決し、それでも協力してくれた方々への感謝と
自分の至らなさへのお詫びの弁を訥々と述べられる半田氏の姿に、
そこにいた人々は深い感銘をうけ、これだけの志士を世に送り出すことのできなかつた
口惜しさにやりきれないものを残して半田事務所を後にしました。

戦いを通して、私たちは半田氏から多くのメッセージを託されました。
どんな時でも心の底から感謝をし続け、多くの人々の幸せを本気で願い、
そのために身を挺してでも戦いに挑む半田氏の姿は、ぼくたちに次代に求められる
政治家の姿を見せてくれたように思います。
そして、政治とは人に規範を指し示し、それを実践していくことであり、
ぼくたちの行動指針である
「たとえ一人でも、己を信じ・人を信じ・そして夢を信じ、実践する。」
を体現する「半田ゼンゾウ」は、正に志信をもつ本当の志士です。

The Winds of God

参院選と同時期、当会の平山氏が統括プロデューサーをしている
映画の企画がもちこまれました。

「The Winds of God 零のあなたへ」は
俳優、今井雅之氏が13年間海外で演じ続けてきた舞台です。
これを映画化し全米公開を目論む企画が今回持ち込まれたものです。
ぼくはたまたま 1999年に、ニューヨーク、オフブロードウェイで公演された
この舞台を観覧していました。神風特攻隊に志願した少年兵は本当に普通の若者で、
家族を守るためこの作戦に参加し命を落としていく姿が、
登場人物の個性とその心情を浮き彫りにしながら描かれているすばらしい作品でした。
超満員の劇場ではアメリカ人を含め観客の大半が
スタンディングオーベーションで幕を閉じました。
この舞台を観た人々には、“No More War”のメッセージは
絶対の真理として訴えかけてきます。

今井氏本人は自ら
メガフォンをとり、
本作品を映画化することを
決意され、志信会も

「The Winds of God」を
支援することを決めました。

実は今井監督は、2001年に
舞台を取りやめる決意を
一度はされたそうです。

それまで13年間神風特攻隊を
題材にするというだけで支援者が集まらず、国内では会場の手配もままならず、
大変な苦勞をしながら続けていました。

この努力の結果アメリカメディアにも取り上げられ、海外でも特攻隊の真の姿が
受け入れられたと判断されたそうです。しかし意を決してから2日後、
2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロが発生しました。

アメリカの報道は、こぞってこのテロを“KAMIKAZE ATTACK”(神風特攻)と叫んでいました。

今井監督は、ご自身の13年間の努力でも全く変わることがなかった現実直面しました。

「俺がやってきたことで何も変わってないじゃないか！」

愕然としたそうです。

そして、よりインパクトがあり、多くの人々に訴えかける可能性を持っている
映画を撮影しようと決心されたそうです。だからこそ、全編英語による撮影が行われました。



2004年の8月今井氏には、2回にわたって志信会の会合に足を運んでいただき、ご自身の映画にかける思いを語って頂きました。

そして今井氏の強烈な思いに心打たれ、多くの参加者が涙を流していました。

誰にも何の支援も得られず、貯金を切り崩しながら

「俺は間違っただけをしていない。」

と信じ続け、13年間もの間舞台に立ち続けたそうです。



特攻隊員達が命をかけて守りたかったものは、
国や天皇なんかじゃない！

本当に守りたかったのは母親、恋人、妹・弟、
愛する人達だけなんだ！

特攻に散った少年兵が死を目前にして叫んだ言葉

「お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、
お母さん、お母さん、お母さん・・・」

そしてこの舞台の脚本を書く際に数多くの取材を通して
今井氏が行き着いた結論は

「く・だ・ら・な・い」

ごく普通の若者達が、家族をそして恋人を守るために
命を奪い合う戦争なんてものはくだらない。

こんなことを二度と繰り返してはいけない。

今井氏のメッセージは挑戦的に聞こえるかもしれませんが。

しかし、戦争そのものはやはり“くだらない”のです。

自らの命を捧げて特攻していくというストーリーの美しさの裏には、
同じ人間同士が殺し合いをしているという醜さがあります。

同じ人間同士が憎しみあっているわけでもないのに、

殺し合う必要なんて本当にあるのでしょうか？

ぼくは絶対にそんな必要はないと思います。

今井氏は「戦争をしている相手は愛情にあふれた同じ人間なんだ！」

という単純なメッセージを伝えることで、

「No More War！～二度と戦争を繰り返してはいけない！」

と世界に向けて宣言しているのです。

そして今でも世界各地で起こっている戦争に対して

「もうそんなことはやめてくれ！」

という悲痛な叫びを発しているのです。

小沢氏来る

満面の笑顔とともに入場された小沢代議士は、

包容力で場内を暖かな雰囲気

包み込んでしまいました。2004年10月16日、

志信会は、ボードメンバーミーティングの席上、

小沢一郎代議士をゲストスピーカー

としてお迎えしました。

小沢代議士は、入場とともにぼくたちの輪の中に

飛び込み、ボードメンバーや

執行部各位との固い握手、そして、そのまま壇上に向かい演説を始められました。

小沢代議士のあまりに衝撃的な登場と、エレガントな流れに、

ぼくは現実感がないまま、しばらく茫然としていました。



小沢代議士は志信会の設立経緯や設立趣旨を踏まえ、

深い感謝の言葉から演説を始められました。ぼくはその姿に理由も分からず、

すごく感動してしまいました。そして小沢代議士が

「二大政党制が必要なんです。もう時間がありません。」

と発せられた言葉に、身の引き締まる思いがしました。

「志信会に、そしてぼくたちひとりひとりに何ができるのか」
が問われているのだと思います。

この最初の出会いから合わせて三度、志信会は小沢代議士をお招きしています。

2度目の小沢代議士招聘が叶ったのは、小沢代議士が

「有志の会である志信会に30分だけでは申し訳ない。再会を期する旨、皆様にお伝えするように」

と仰っていただいたからです。そして、最初の招聘から3週間後に実現しました。

このお話を聞いたとき、志信会のメンバーが感動に包まれたことは言うまでもありません。

そして2度目の会合は講演ではなく、小人数のテーブルに小沢代議士がお座り頂き、
一人一人に声をかけていただくものでした。

歓談の最中も終始和やかな雰囲気、笑いで満たされていました。

そうする中でぼくたちの疑問にも一つ一つ本当に真摯に答えていただき、

「志を高く持ちそれに向かって日々誠実に生きていれば必ずその思いは通ずる」

という自らの信念を語っていただきました。



実際に会った小沢代議士の印象は

メディアで報道されている

“ヒール”のイメージとは似てもつかないものです。穏やかでありながら必死に

“祈り”を捧げる



純粹な少年のようで、
ぼくは本当に美しいと思いました。

Works Entertainment

志信会・ボードメンバーの一人前田徹也さんには、

2004年から志信会を支えていただいています。

前田さんは人材紹介、人材派遣で有名な株式会社インテリジェンスを

宇野氏 [(株)USEN 代表取締役]、鎌田氏 [(株)インテリジェンス 代表取締役]、

島田氏 [(株)楽天球団代表取締役]とともに創業した方です。

(※電書版注：各位の肩書は執筆当時のものです)

前田さんはこのような輝かしいご経歴をお持ちでありながら、

それを鼓舞することもなく、他人への尊敬の念を恒にもっていて

ぼくたちに、自らの悩みや喜びまで語っていただける魅力あふれる方です。

前田さんはインテリジェンスを創業してからずっと仕事に生き、

インテリジェンスが上場するまで走り続けましたが、体調を崩されインテリジェンスを去られました。

その時、

「何のために仕事をしてきたのか？幸せになるために働き続け

夢である上場も果たしたのに自分自身は幸せだったのか？」

と自分に問いかけたそうです。その後5年間その疑問を抱えたまま悩み続けたと言います。

そして2005年に

ワークスエンターテイメントネットワーク

を主宰し、2006年1月、

株式会社ワークスエンターテイメントの

代表取締役会長に就任されました。

前田さんは

「この会社は、幸せを分かち合える

社会を創るために設立しました。」

と語ってくれました。

この日本で毎年約3万人の自殺者がでます。

その多くの理由が仕事の悩みだそうです。

前田さんは

「仕事を心から楽しいものにする、そして今日よりも明日が

ほんの少しでも良いものにしていくこと」をめざし、

使命感に突き動かされてワークスエンターテイメントを設立されました。

志信会と出会った当初、前田さんは「私は政治や政治家には何の期待もしていません」

と仰っていましたが、後に

「私は間違えていました。今は本物の政治家に国を託そうと思いますし、

商人である私は、志信会を信じてできる限りのことをさせていただきます。」

と語っておられます。ぼくはその潔さ、人間としての大きさに心が震えました。



市民による日本一新

日本一新とは、小沢代議士が自由党時代に日本を変えることを目的として打ち立てた御旗で、具体的法案として国会にも「日本一新十一基本法案」が提出されています。市民による日本一新の会は小沢代議士の「懐刀」と呼ばれた平野貞夫氏（元参議院議員）が主宰し、日本一新と理念を同じくしていますが、国民の手による「日本一新新基本構想」を創り、国民運動を展開しようとするものです。

平野さんは小沢代議士らとともに自民党を離党、旧新生党、旧新進党、旧自由党結成に参加しました。そして2004年「永田町の古い政治家のしがらみを捨て、政党の枠を超えて国民と共に政治活動をしていきたい」として参院選を前に引退されました。

平野さんは語ります。

『いま、日本は二つの課題に直面しています。一つは、戦後の情性を改革して、自立した国家をつくることです。もう一つは、20世紀の終わりから始まった歴史の転換期（重化学工業社会から情報知識社会への第三次産業革命）に対応して、どのような新しい社会のシステムをつくるかという課題です。いままでの「お金・もの中心の社会」から、「人間・こころ中心の社会」をつくるために何をすべきか、ということです。』



平野さんは参議院を勇退後、国会議員ではできなかった活動に積極的に取り組んでいらっしゃいます。平野さんには、市民による日本一新の会設立総会以来、積極的に志信会の運営にご参加いただいておりますが、清廉潔白なそのお人柄（なかなかコーヒー一杯もご馳走させてはもらえません。）もさることながら、そのエネルギーに周りの人間は惹きつけられてしまいます。平野さんの活動の幅は執筆からマスコミ出演など多岐にわたりますが、その内容は過激であり、その姿勢は恒にチャレンジャーでしかも、楽しいのです。志信会は平野さんの市民による日本一新の会とその理念において通じており、協力し合いながらその理念を広めて行こうと思っています。

過去、そしてこれからの志信会

大西会長が悩みぬいた末に、
志信会の創設を決意した時に出会った一節を、
ここにご紹介します。

「我、願わくば、太平洋の架け橋とならん」

1883年、当時の東京帝大への入学時、
外山教授の問いに対し、
22歳の新渡戸稲造はこう答えました。
日本の思想と文化を正しく外国に伝え、
西洋の思想と文化とを、日本にも正しく普及させる。
そしてその思いが「武士道」を書くきっかけになりました。

「どういう生き方をする？」
は、ぼくたちひとり一人に課せられた最大の課題です。
設立から今日まで、ぼくたちは会の理念の元、
様々な活動を展開してきました。
創設以来、大西会長は
「他団体との連携とリクルーティング」
を常に念頭に行動してきました。
それが現状を変える力になると信じ、
会の創設当初、大西会長はその意義や必要性を説明するため、
資料を携えながら多くの方々にお会いしました。

「世界を変える」という、
とてつもなく大きなスローガンに共感し、
太平洋に羅針盤のない小船で漕ぎ出したような
状態にあった大西会長を支えていただいた
メンバーの皆様にご心からの喜びと感謝をいただきながら、
これからも気高さをもって
会を運営していかねばならないと
執行部一同いつも肝に銘じています。

そして2006年から志信会のセカンド・ステージとなる
「あらたなる挑戦」が始動しました。
志信会は現在、政治、経済、文化、教育
の4つの事業とそれをつなげる理念として
ミッションセンターで構成されています。



そして会の草創から現在に至るまでの間、
各種事業にご参加ご参画頂いた方々は 300 名を超えました。



皆様には、この場をお借りして、あらためて心より感謝申し上げます。
また、まだまだ発展途上の志信会ですが、
今後とも変わらぬご支援のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

あとがき

ここまでぼくの乱文にお付き合いいただきまして、
心からお礼申し上げます。
本当にありがとうございました。

ぼくは、志信会創設前夜から今日まで大西信弥会長と一緒に活動を進めてきました。
今回「大西信弥物語」を執筆する機会をいただいたので、
ぼくなり「大西信弥」、そして志信会を描いてきました。

まだまだ、描ききれていないなあと感じていますが、
大西信弥という人間をまだご存知ない皆様や
「会長は得体が知れない」と思われている方々の助けに少しでもなれば！
と思っています。
これからも志信会をよろしく願いいたします。

大芝太郎

わが為すこと、我、知る

<http://p.booklog.jp/book/90059>

著者：大芝太郎

電書版編集：あるほっぷ倶楽部

プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/alhopclub/profile>

あるほっぷ倶楽部

<http://alhop-club.com>

志信会

<http://shishinkai.org>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90059>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90059>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ